

環境 PT アドホック会合（流域圏・生態系）  
「伊勢湾流域圏の再生と科学技術」の概要  
（平成 19 年 5 月 9 日）

1. 流域圏における問題構造の把握  
伊勢湾流域を例として、狭い地域で解決できる問題と広域で取り組むべき問題を分類し、流域が抱える問題の構造を明らかにする必要がある。
2. 各地域の取組みと流域圏全体の管理との整合性  
各主体が行っている取組みを整理し、流域管理の視点から各取組みの整合性を検討する必要がある。
3. 流域圏管理の方法論の開発  
流域圏と行政区界とは異なる。そこで、流域圏管理の主体、管理目標（期間（短期、中期、長期）、環境基準、排出基準、対象物質など）および評価基準を検討する必要がある。
4. 市民にとって分かりやすい評価基準の設定  
激甚な公害問題が発生していた時代と比べると、現在は、環境改善することが必ずしも市民の満足度の向上に直接つながるとはいえない。例えば、水質が改善することで、自動的に市民の満足度が向上するわけではない。流域管理に限らず、市民の事業に対する理解が得られなければ、事業の継続は難しい。市民の満足度を考慮した事業評価基準を検討する必要がある。
5. 行政・研究者・市民の協力関係のあり方  
環境教育、モニタリングなどにおいて、行政・研究者・市民の新しい協力関係を検討する必要がある。

環境 PT アドホック会合(流域圏・生態系)  
伊勢湾流域圏の再生と科学技術  
～人文社会科学と連携した流域圏研究の推進～

日時:2008年5月9日(水) 13:30～17:30

場所:三田共用会議所大会議室

<目的>

平成19年3月、東京湾、大阪湾に続いて「伊勢湾再生行動計画」が策定された。今後、この行動計画に基づく具体的な取組みを実施していく上で、モニタリング、汚濁メカニズムの解明、対策の評価等、科学技術の成果が一層重要な役割を果たすことが期待される。総合科学技術会議では、これまでも「自然共生型流域圏・都市再生技術研究」において、これに関連する研究開発を積極的に推進してきた。今後はさらに、人文社会科学との連携も強化しながら、より実践的な研究開発を推進し、持続可能な社会を目指した環境イノベーションに結実させていく必要がある。そこで、この会合では、伊勢湾流域圏をモデル地域としながら、順応的管理手法や流域圏プランニング、事業評価手法をはじめとする、さらに実践的な研究開発を進めていく可能性について探る。

<プログラム>

- |                  |             |
|------------------|-------------|
| 開会の辞             | (薬師寺泰蔵)     |
| 1. 趣旨説明          | (青木康展)      |
| 2. 伊勢湾再生行動計画について | (伊勢湾再生推進会議) |
| 3. 流域・沿岸工学の視点から  | (辻本哲郎)      |
| 4. 都市緑地計画の視点から   | (石川幹子)      |
| 5. 地域経済学の視点から    | (奥田隆明)      |
| 6. 環境政策の視点から     | (竹内恒夫)      |

総合討論

司会:大垣真一郎

鷲谷いづみ、講演者、政策担当者(環境省、愛知県環境局、名古屋市環境局)

閉会の辞 (青木康展)